

藥師寺

旧境内保存整備計画とともに発掘調査概報Ⅲ

2014

藥師寺



調査区全景（拡張前）東から



南北廊の基壇と基壇外装（南東から）



北拡張区全景（北から）

序

薬師寺は天武天皇の発願により白鳳時代に建立され、平城遷都（710年）に伴い養老2年（718年）に現在地に移されました。

平安時代以降は火災や震災、兵火等による堂塔の消失と復興を繰り返し、廃仏毀釈や農地解放で寺地は狭小化し、戦後には主要伽藍を構成する建造物は、東塔と東院堂の他、旧金堂などの数棟が建つのみとなっていました。

このような状況の中、薬師寺は昭和40年代以降、お写経勧進による伽藍の復興を進め、昭和51年に金堂、北西僧坊を復興し、以来北東僧坊、西塔、中門、回廊、大講堂と復興しています。

今回の十字廊発掘調査は、昨年の食堂発掘調査に続くもので、基壇縁辺部では羽目石を用いた基壇外装と、雨落溝なども検出され、十字廊の基壇や建物の規模が明らかになりました。また、十字廊の東側では、東小子房の一部も確認され、北側の空間利用についても新たな事実が明らかになりました。

薬師寺では、今後も史跡薬師寺旧境内保存整備基本計画並びに発掘調査に基づき、白鳳伽藍復興を進めたいと願っております。

平成26年3月

法相宗大本山 薬師寺

管主 **山田法胤**

目 次

序	
目 次	
1 調査の概要	3
2 十字廊の歴史と既往の成果	
(1) 薬師寺の創建と十字廊の歴史	4
(2) 既往の発掘調査	5
3 検出遺構	
(1) 調査前の地形と基本層序	6
(2) 十字廊の遺構	9
(3) 十字廊と同時期と考えられる周辺の遺構	13
(4) 十字廊建立以後の遺構	15
4 出土遺物	
(1) 瓦塊類	17
(2) 上器・土製品	20
(3) 金属製品等	22
5 結 語	
(1) 薬師寺十字廊の建築	23
(2) 十字廊の造営と廃絶の年代	24
(3) 十字廊周辺の様相	24
(4) 他の寺院との比較	25

報告書抄録

例 言

1. 本書は薬師寺旧境内保存整備事業にともなう平成25年度の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は法相宗大本山薬師寺の委託を受けた独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部（平城地区）が、平成25年9月17日から平成26年2月28日にかけて実施した。
3. 調査は、箱崎和久・馬場 基・小田裕樹・庄田慎矢が担当し、三好勇太が参加した。また、石材の鑑定には脇谷草一郎、金属製品の材質分析には田村朋美、木材の年輪年代測定には星野安治・児島大輔があつた。
4. 調査にあたっては、文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の協力を得た。
5. 本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第519次調査として実施したもので、各遺構には平城京右京における調査基準にしたがい一連の番号を付した。発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第VI系）による。
6. 本書の作成は、副所長・小野健吉の指導のもと調査員全員であたり、全体の討議を経ておこなった。編集は庄田慎矢が担当した。各項目の執筆については、4（1）を石川由紀子、4（2）を小田裕樹、その他を庄田慎矢が担当した。
7. 遺構・遺物の写真は、中村一郎・栗山雅夫・鎌倉 繼が撮影した。
8. 表紙題字は薬師寺山田法胤管主の手によるものである。

1 調査の概要

法相宗大本山薬師寺では、2011年から始まった薬師寺旧境内保存整備計画にもとづいて、境内の整備事業をすすめている。今回の調査はその一環として、十字廊の基壇や建物の正確な規模や位置、基壇外装の様相など、全容を解明すべく、過去に奈良文化財研究所（2000年以前は奈良国立文化財研究所、以下奈文研）が発掘調査をおこなった十字廊西部の既調査区に一部重ねて、十字廊の中央部以東を主たる発掘調査対象とした。あわせて、十字廊と僧房の一部である東小字房の関係を明らかにするため、東西約39m、南北約21mの調査区を設定した。さらに、調査の過程で十字廊基壇の北端が設定した調査区よりも北方に想定されたため、十字廊の北端を明らかにする目的で、南北17m、東西3mの細長い調査区を北方に拡張した。調査面積は合計約872m²で、そのうち新規発掘部分は約768m²となる。

調査に際し、事前に調査対象地に植えられていた樹木の伐採・伐根、石垣や石垣の撤去等をおこなった。なお、今回の調査区の周囲には防災用の消火栓や電気・水道等の配管、あるいは現代の暗渠が埋設されていたため、調査区の縁辺部では造構面まで掘削できなかった部分がある。

今回の調査により、十字廊の建物および基壇の規模がほぼ確定し、基壇築成の工程や基壇外装の様相、造営や廃絶に関する年代的特徴がかりなど、多くの知見を得ることができた。また、十字廊の東側にある東小字房などの建物や、十字廊の北側に位置する施設に関する造構も確認し、十字廊の周辺の空間利用についても新たな知見を得た。このことは、薬師寺内部の施設配置という面だけでなく、全国的にもほとんど明らかにされていない古代寺院における食堂の背後の具体的な様相を明らかにしたという面でも、貴重な成果となった。

第1表 調査経過

9月13日	調査区設定。
9月17日	調査開始、重燃掘削。
10月4日	重燃削後出開門。
10月18日	SK3122から鬼瓦や施物陶器が出土。
11月5日	SK3117から多量の土師器皿が重なって出土。
11月6日	南北庭東面南無阿彌陀如来坐像外装検出。
11月8日	バングラデシュ考古学者らが調査に参加。
11月13日	中学生が職場体験で調査に参加。
11月21日	土器出土状況の写真撮影および三次元計測。
11月27日	調査区東北部で北柱柱石SA3137を検出。
12月2日	十字廊北側柱列の礎石剥付瓶跡を検出。
12月6日	写真撮影、木棟に対する年齢年代調査。
12月9日	基壇を焼いていた土坑SK3112・13を検出。
12月12日	十字廊南側柱列の礎石剥付瓶跡を検出。
12月24日	羽目石・雨落溝用瓦石の石材確定。
1月7日	南北庭の礎石剥付瓶跡を検出。
1月14日	東小字房の礎石剥付瓶跡を検出。
1月15日	クレーンを用いた写真撮影。
1月16日	ハイライダーを用いた写真撮影。
1月17日	平面圖作成。
1月21日	礎石剥付瓶跡の断面調査、延長区調査開始。
1月22日	部員による現場検討会。
1月24日	北庭区北端で健石建物SB3101を検出。
1月31日	北延張区写真撮影。
2月13日	記者発表。
2月15日	現地説明会。見学者350名。
2月17日	埋め戻し開始、追加調査。
2月28日	埋め戻し完了。



第1図 発掘調査区位置図 (1 : 3000)

2 十字廊の歴史と既往の成果

(1) 薬師寺の創建と十字廊の歴史

薬師寺 薬師寺は『日本書紀』によると、天武天皇9年(680)に天皇が皇后(のちの持統天皇)の病気平癒を祈願して発願した寺院とされる。これが藤原京の薬師寺であり、現在は本薬師寺と呼ばれ、橿原市城殿町に東西両塔および金堂の土壇を残す。その後、和銅3年(710)の平城遷都とともに奈良時代の薬師寺も平城京右京六条二坊に寺地を移し、以来現代まで法灯が受け継がれている。平城京の薬師寺造営に関しては、長和4年(1015)に撰述され、元弘3年(1333)に書写された薬師寺本『薬師寺縁起』(以下『縁起』と略す)に、養老2年(718)に伽藍を移すとの記載がある。しかし昭和52年度の発掘調査で、東僧房北側の井戸より、靈龜2年(716)の年紀のある木簡が、本薬師寺式の瓦や奈良時代初頭の土器などとともに出土したことから(『薬師寺発掘調査報告』森文研 1987、以下『薬師寺報告』と略す)、建物の造営自体はそれ以前には始まっていたことがうかがわれる。堂塔の建立の具体的な年に関しては、東塔のみ記録があり、天平2年(730)に建立されたことが『七大寺年表』や『扶桑略記』などに見える。

十字廊 十字廊は、国内はもとより海外でも同じ名称の施設は見当たらず¹、『薬師寺縁起』によれば食殿とも呼ばれていたことがわかる。その機能は明らかではないが、食殿という別称からうかがえるように、廊としての機能だけでなく、食堂に付帯する機能をもっていた可能性もある。『薬師寺概報』においては、基壇の西北部で検出された井戸の廃絶年代から、おそらく奈良時代後半には建てられたと考えられている。

『薬師寺縁起』によれば、十字廊の規模は、東西14丈1尺、南北5丈6尺、柱高9尺2寸とされる。他の建物がその規模を「長14尺、広5丈4尺5寸(金堂の事例)」のように長・広で表現するのに対し、十字廊は東西・南北の大きさで表現することから、その名の通り十字形の平面形状をした建物だったことがうかがわれる。十字廊は、天暦4年(973)に「食殿堂童子宿所」から出火した火災により焼失した(『薬師寺縁起』、『扶桑略記』)。この火災は、薬師寺創建以来初めてとなる大規模な灾害で、金堂と東西両塔以外の主要な伽藍のほとんどが焼失している。

その後、十字廊は寛弘2年(1005)に再建されたと記録されているが、それ以後は十字廊に関する文献史料はみあたらず、いつまで存続したかは不明である。延宝2~4年(1674~76)の作とされる『伽藍寺中并阿弥陀山之図』(第2図)や元禄2年(1689)の伽藍絵図など、江戸時代の絵図には十字廊が描かれていないので、遼くともこの頃までには廃絶していたことは確実である。



第2図 『伽藍寺中并阿弥陀山之図』(部分)

¹ 十字という形態のみから見れば、韓国慶州市に存在する統一新羅時代の伝仁容寺の「十字型建物」があるが、細かな特徴や伽藍の中での位置などにおいて薬師寺十字廊とは大きく異なるため、類似としては扱いがたい。(『伝仁容寺址発掘調査中間報告書』国立慶州文化財研究所 2009)

(2) 既往の発掘調査

前述のように、十字廊の西半は昭和52年度に奈文研によって発掘調査がおこなわれている（『薬師寺報告』、第1回）。この調査で、それ以前にはその位置について議論のあった十字廊が、食堂の背後に存在することが明らかとなった。この調査では、十字形の平面のうち東西に長い東西廊西半の桁行4間、梁行1間分の礎石据付痕跡と、南北に長い南北廊の西側柱1間分の礎石据付痕跡を検出した。さらに、基壇外装は、凝灰岩製の羽目石を直接地面上に立て並べる形式であったことも明らかになった。また、十字廊の基壇西北に掘られた井戸が基壇築成にあたって西側に造り替えられており、その時期が出土文物から奈良時代中頃と推定されるので、十字廊の建立時期を奈良時代後半頃に求められたとした。

これらの発掘調査成果と『薬師寺縁起』に書かれた「東西14丈1尺、南北5丈6尺」という規模とともに、十字廊の建物は、桁行11間、梁行2間の東西棟（東西廊）の中央から、正面（南方）に3間、背面（北方）に1間の張り出し（南北廊）のある十字形平面の建物であり、食堂と東西長がほぼ等しいと想定された（『薬師寺報告』）。柱間寸法は、東西廊桁行が中央間15尺、順次14尺、13尺となり両端各3間を12尺とし、梁行きが17尺2間で各8尺5寸、南北廊桁行は南側3間が10尺等間、北側は未確認であるものの上記の5丈6尺に照らして北に9尺1間がのびるとした。また、『薬師寺縁起』にある再建の記事に対応する遺構が検出されなかつたため、天暦4年（973）の火災後には再建がなされなかつたものと判断している。

いっぽう、薬師寺では大房・付属屋・小子房からなる西僧房が昭和52年度の発掘調査で確認されている（第1回）。この調査により、西小子房は西大房と南北方向の柱筋を掘えてその北に並列して建ち、桁行18間、梁行2間、柱間寸法は桁行10尺、梁行7尺の礎石建物であることが明らかになっている（『薬師寺報告』）。東小子房にはこれまで発掘調査が及んでいなかつたが、昭和44年度および45年度に発掘調査された東僧房の大房が西僧房の大房と同規模・同形式であるため、東小子房もまた西小子房と同規模・同形式と想定された。

他方、十字廊の北方についても、昭和50年度に奈文研が発掘調査をおこなつており（第1回）、奈良時代の掘立柱建物2棟を検出している。2棟とも南北2間×東西4間以上の東西棟建物と考えられ、遺構が重複することから建て替えたものとみている。また、これらの建物が食堂および十字廊（食殿）の後方に位置することから、ともに大炊屋などに関係する建物と想定された（『奈良国立文化財研究所年報』奈文研 1976）。

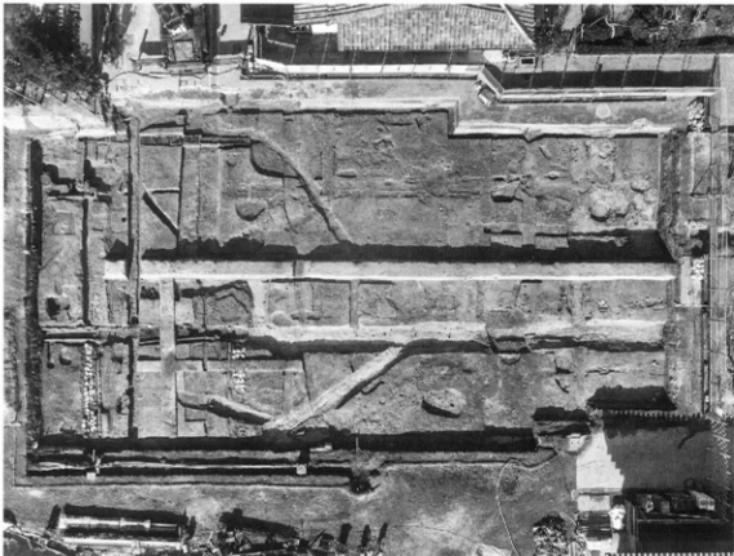
また、今回の調査区の南に隣接する食堂は、奈文研が平成24年度に実施した発掘調査（平城第500次調査）の結果、桁行11間、梁行4間の東西棟礎石建物であり、柱間寸法については桁行41.4m（140尺）、梁行16.0m（54尺）の復元案Aと、桁行40.7m（137.5尺）、梁行16.0m（54尺）の復元案Bが考えられた。基壇規模は、東西47.1m（159.1尺）、南北21.6m（73.0尺）であることが明らかになっている。また、食堂の存続時期については、造営が近くとも奈良時代前半にさかのぼり、天暦4年の火災後にその規模や礎石位置を踏襲して再建されたものの、その後12世紀代に廃絶した可能性が高いことが明らかになつた（『薬師寺旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報I』奈文研 2013、以下『薬師寺概報I』）。

3 検出遺構

(1) 調査前の地形と基本層序

調査前の地形 調査対象地域は、薬師寺中心伽藍への北方からの参拝者入口である興楽門からつづく参道に該当する部分である。石畳で舗装された参道の両脇には、石垣で整えられた盛土の上に多数の樹木が植えられていた。それ以前は、山田法胤管主によると、調査区付近を南北に貫く寺内道路が走っており、その東側は水田および耕作地、西側は耕作地や雑木林であったという。また別の聞き取りによれば、昭和年間には駐車場として利用されていた時期もあったとのことである。

基本層序 前述のような近現代における土地利用のため、基本層序は調査区の東西で大きく異なる。近現代の耕作により上部を削平された東半部では、近現代の整備盛土（厚さ約60cm）および耕作土（約30cm）の直下に、瓦片を多量に含む時期不明の包含層（約20cm）、その下に遺構検出面である整地土（約10~30cm）が堆積し、地山に至る。西半部の基本層序は、表土（約20cm）、近現代の整地土（約60cm）、十字廊の基壇土および整地土（約10~40cm、奈良~平安時代）、地山である。以下では（2）十字廊に関する遺構、（3）十字廊と同時期と考えられる遺構、（4）十字廊建立以後の遺構に分けて記述するが、いずれも奈良時代の整地土および地山上で検出された遺構である。その他、整地土ないしその上層では室町時代以降の遺構として瓦暗渠SX3115、木樋を設置した溝SD3111、十字廊基壇を破壊する近世以降の溝SD3108、SD3109、SD3121、SD3122、SD3123、SD3124、近現代の大土坑SK3133なども確認したが、本概報ではこれらについての詳細は省略する。



第3図 調査区全景（塗抹前）

Y-19,890

Y-19,790

Y-19,780

Y-19,770

Y-19,760

Y-19,750

Y-19,740

Y-19,730

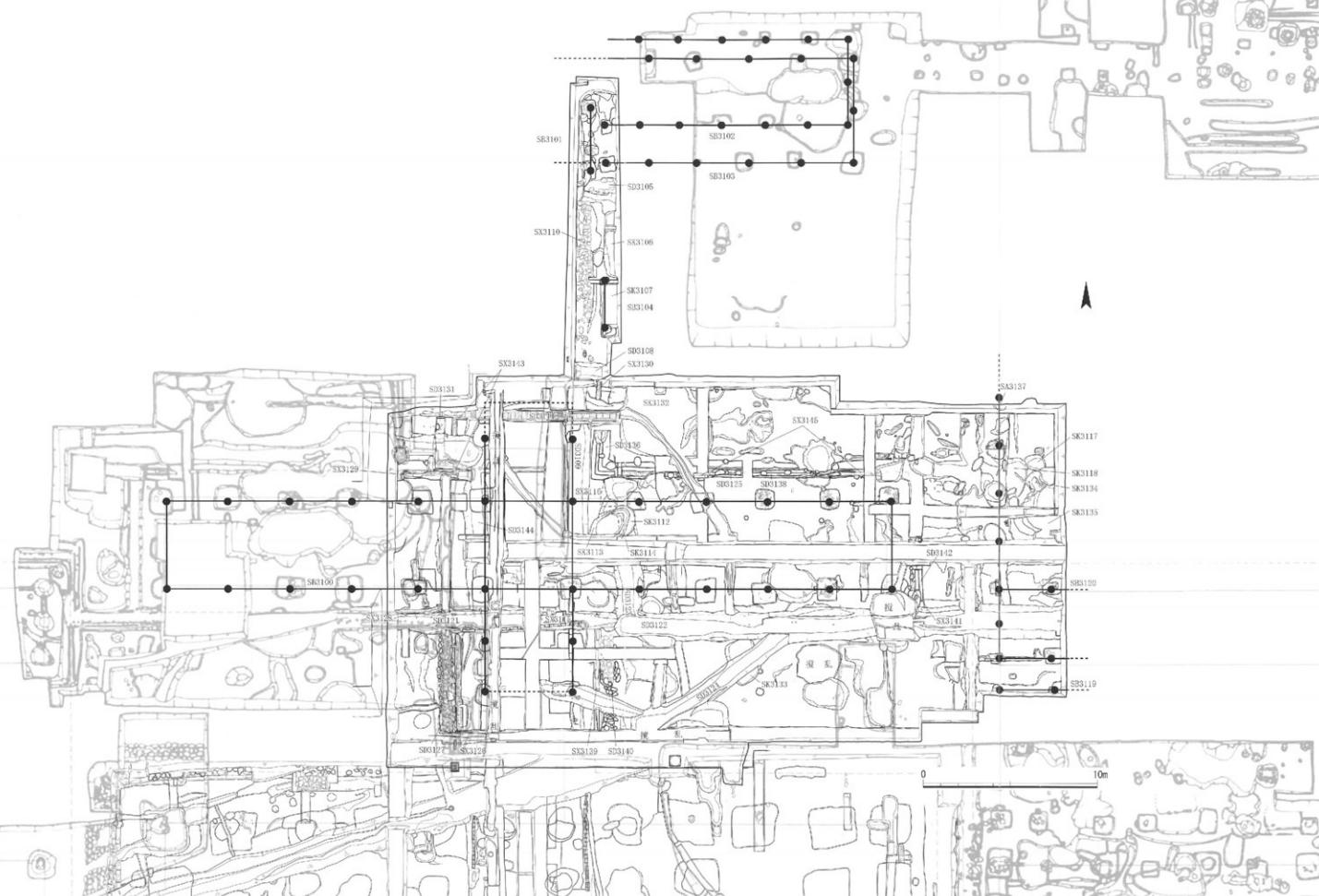
Y-147,500

Y-147,570

Y-147,580

Y-147,590

Y-147,600



第4図 平城第519次調査および周辺の遺構平面図 (1:200)

(2) 十字廊の遺構

今回の調査では、十字廊の中央部から東部にかけての基壇および礎石据付痕跡を検出した。調査区内で検出された礎石据付痕跡は21箇所で、このうち4箇所は、昭和52年度の調査で検出されていたものである。この結果と過去の成果を総合すると、十字廊SB3100は基壇をもつ礎石建物で、東西廊が桁行11間、梁行1間、南北廊が桁行4間以上、梁行1間、その規模は東西41.7m(141尺)、『薬師寺報告』の薬師寺造営尺である1尺=29.6cmとして算出、以下同様)、南北14.5m(49尺)以上であることが明らかになつた。「薬師寺縁起」によれば、十字廊の規模は、東西14丈1尺、南北5丈6尺とされるが、今回の調査結果もそれに近い。東西廊と南北廊は、東西廊の中心すなわち東西両側から6間目、南北廊の南から3間目で互いに接続する。

『薬師寺報告』においては、南北廊は接続部より南側に3間、北側に1間と想定しているが、今回の調査では接続部より南に2間北に1間を確認した。ただし、南北廊東面・西面の基壇外装や雨落溝はこれより北または南にさらにのびるため、南北廊については南側に2間ないし3間および北側に1間ないし2間と修正される。また、東西廊の梁行は2間と想定されていたが、東妻中央の礎石据付痕跡は確認できなかつたため、1間の可能性が大きい。

柱間寸法は、董地業の規模が大きいため柱心の位置を特定しにくいつつ、東西廊の桁行は中央間が約5.0m(17尺)、その外側各2間が約3.8m(13尺)、両脇各3間が約3.5m(12尺)、梁行は約5.0m(17尺)と想定できる。東西廊は南北廊の南から3間目に接続する。南北廊は、桁行が接続部より北1間で約3.5m(12尺)、接続部が約5.0m(17尺)、接続部より南2間が約3.0m(10尺)、梁行は約5.0m(17尺)である。

基壇外装は、地覆石を用いずに羽目石を直接地面に立てる。羽目石列の外側には、10cm程度の間隔をあけて、十字廊南北では繋敷を施した雨落溝を、北半では素振りの雨落溝をめぐらす。基壇の規模は、東西廊では、昭和52年度の調査で検出した東西廊西面基壇外装の羽目石外側から今回の調査で検出した東西廊東面基壇外装SX3141の羽目石外側までの距離で、東西44.4m(150尺)である。南北は調査区西部で検出した東西廊北面西側の基壇外装SX3129と東西廊南面西側の基壇外装SX3128の羽目石外側間で、8.3m(28尺)である。いっぽう南北廊では、東西の幅は東面南側の基壇外装SX3139と西面南側の基壇外装SX3126の羽目石外側間の距離で東西8.3m(28尺)である。南北の長さは、南北廊の北端および南端が後世の削平のため明確ではないが、基壇上および基壇外装の残存部分から推定すると、およそ21m(70尺)である。

建物規模は礎石据付痕跡の配置によって、基壇規模は基壇土や凝灰岩製の羽目石を用いた基壇外装、そしてその据付溝および抜取溝の分布によって把握することができた。



第5図 SD3121(右下)・SD3122(左上)によって破壊される十字廊SB3100の南東入戸部(北面から)

A. 基壇

遺構の遺存状況の良い調査区西南部では、現地表面下約30cmで基壇土を検出した。基壇は、特に調査区東半で近代以降の耕作や用水路などにより、大きく削平されている。基壇は版築によって積まれており、調査区西南部の最も残りの良い箇所でも雨落溝底石の上面からの残存高は10cm未満で、標高は60.08mである。東西廊の基壇の南辺や、東西廊と南北廊の接続部の大部分は、中近世の水路あるいは導水管等を埋設するための溝SD3109・SD3122・SD3144により破壊されている（第5図）。

基壇外装とその内外の土層断面観察から把握した基壇の集成過程は、次の通りである。まず、基壇の集成にあたって、地山上の整地土、あるいは地山を10cm程度掘り込んで（ただし、確認されたのは南北廊南端付近のみ）、基壇範囲と周辺とを一体的に整地した後、周辺とは異なる基壇土（凝灰岩の細屑を部分的に多量に含む）を版築によって積んだ後、基壇外装を整える。

整地土および基壇土の厚みの単位は10～15cm程度である。南北廊基壇南端想定位置で地山を掘り込んだ痕跡を確認したが、この層の境界を平面および断面で東西に追跡したところ、整地範囲は十字廊の平面形に合わせたものではなく、付近一帯に広く及んでいた。また、基壇土が礎石据付痕跡の掘方の一部を覆い、掘方を確認できない箇所もあるため、礎石の掘え付けと基壇の積み上げが一部並行しておこなわれたことがわかる。

B. 基壇外装とその周辺

基壇外装は、凝灰岩製の羽目石を直接地面に立て並べる形式で、その外側には10cm程度の間隔をあけて雨落溝が設けられている。羽目石を地面に直接立てる形式の基壇は、薬師寺においては、中門や回廊でも用いられている。外装の羽目石そのものを検出したのは、南北廊西面南側（SX3126、第6図）、



第6図 南北廊西面南側の基壇外装SX3126および雨落溝SD3127（北から）



第7図 基壇外装SX3126と雨落溝SD3127の掘付状況（北から）



第8図 基壇外装SX3128と下部の瓦片の挿入（南西から）



第9図 東西廊南面西側の基壇外装SX3128とその雨落溝
相当位置を踏襲する後世の溝SD3121（西から）



第10図 東西廊北面東側の基壇外装括付溝SD3138および抜取溝SD3125、雨落溝SD3136（東から）

同東西南側（SX3139）、同東面北側（SX3130）、同西面北側（SX3143）、東西廊北面西側（SX3129）、同北面東側（SX3145）、同東面（SX3141）である。羽目石列の外側に、それぞれに伴う雨落溝SD3127（第6図）、SD3140、SD3136、SD3131、SD3142を検出した。また、L字形に接続するSD3138およびSD3125は東西廊北面東側および南北廊東面北側の基壇外装の据付溝および抜取痕跡で、内部からは細かな凝灰岩片や瓦片が出土した。

基壇外装は、基壇範囲の内外におよぶ整地をした後に基壇土を積み、基壇外装の位置に据付溝を掘りこんで羽目石を設置する。SX3126における断割部分での羽目石底の標高は、59.74~.77mである。雨落溝側石の頂部の標高60.05~.08mや、据付溝検出高60.05mを参考にすると、羽目石が埋められた深さは30cm前後ということになる。

羽目石を設置した後、あるいはこれと並行して、雨落溝の据付溝を掘削し、川原石を置く。据付溝の外肩は基壇の外側に施された整地土によって覆われている。なお、一部では瓦片を羽目石の下部に挿入している部分がある（第8図）。これらは、羽目石上端の不陸調整のために意図的になされたものと判断される。

雨落溝は、南北廊東・西面の両側では20~40cmの大いな安山岩・花崗岩・片麻岩・流紋岩・チャートなどの川原石を敷いて造られている。これらを溝の底面に2~3列敷きつめ、両側に側石をおいて、側石上端を底石上面より15cm程度高くする。南北廊西面北側（SD3131）および東面北側、東西廊北面（SD3136）・東面（SD3142）では石を敷いた痕跡ではなく素掘りで、東西廊の北面と南面では雨落溝の仕様が異なる。雨落溝の幅は、東西廊より南側では側石内々で60~70cm、北側では40~50cmである。東西廊南面の西側には、板をあてて杭で固定し堰板とした溝SD3121（第9図）を検出したが、これは従来東西廊の雨落溝が存在した場所を踏襲し、後世に改修したものと考えられる。SD3121は南北廊



第11図 十字廊SB3100東西廊（東から）



第12図 東西廊南側柱列の礎石据付痕跡の断面（北から）



第13図 東小子房SB3120西北隅の礎石据付痕跡の断面（東から）

の基壇を横断し東方へと続くが、遺構としては確認できなかったものの、排水の便を考えると、南北廊を分断するこの位置にもともと暗渠があった可能性もある。なお、SD3121の護岸に用いられている板に対する樹種同定および年輪年代調査をおこなったところ、樹種はヒノキで、西暦554年以降に伐採されたことを把握した。ただし、辺材が確認されていないことから、この年代はあくまで上限年代を示すものである。

薬師寺十字廊の羽目石には、薬師寺食堂と同様、二上山山麓や春日山の地獄谷で産出する凝灰岩が用いられており、調査区内の各所に残存していた。特徴的なのは、肉眼およびルーペで観察し、高温型石英の有無に基づいて分類して产地推定をおこなった結果、南北廊西面南側のSX3126に地獄谷産の凝灰岩が集中的に用いられているのに対し、その他の大半の箇所では二上山産の凝灰岩が用いられている点である。食堂では地獄谷産の凝灰岩は基壇南辺における据え替えとみられている（『薬師寺概報1』）が、今回の調査で検出された羽目石は、据え替えの痕跡がみられないことからすべて当初のものと考えられる。

また、羽目石の大きさは長さ50～60cm、幅は15～20cmで、長さ1.7～2.0尺、幅5～7寸を基準に刻まれたものと考えられる。傾向としては、東西廊よりも北で検出された石のはうがやや小さい。なお、SX3126やSX3128の羽目石の下部では、鉄製工具で刻んだと考えられる溝が観察されるものがある。運搬の際の縫がかりとして刻まれたと推測される。

C. 磂石の据付痕跡

十字廊SB3100の礎石は調査区内にはまったく遺存していなかったが、1辺1.1～1.5mの隅丸方形の礎石据付痕跡を21箇所（うち4箇所は旧調査ですでに確認済みのもの）で確認した（第4図および第11図）。東北入隅部では、近世の溝SD3109が深く掘り込んでいるため、礎石据付痕跡を検出できなかった。西北入隅部では礎石据付のために癒地業を施した痕跡を確認した。砂質土や粘質土を層状に積む版築

をおこなったり、10cm角程度の瓦片を意図的に敷き詰めたりしている。積土の単位は厚さ10~20cm程度である。場所によっては基壇底面よりも礎石据付穴をより深く掘りこんでいるため、礎石据付痕跡の下部が地山を直接掘り込んでいる部分も見られる。礎石据付痕跡からの出土遺物には薬師寺の創建軒平瓦(661G)を含む奈良時代の瓦片があるが、平安時代以降のものは見られない。

なお、礎石据付痕跡や壇地業の残存高さ(深さ)は、断面を確認できる場所で最大25~45cm、最小10~15cmであり、残存状態は良好とはいえない(第12図)。基壇土の残存状態とあわせて考えると、具体的な数値は知り得ないものの、遺構の上面はかなりの削平を受けているものと想定される。

(3) 十字廊と同時期と考えられる周辺の遺構

東小子房SB3120 西端の桁行1間分、梁行2間分を検出した。棟通りの柱も存在したと考えられるものの、その想定位置は近世の溝SD3122が礎石据付痕跡の底面の標高よりも深く掘り込んでいるため、遺構が確認できない。柱間寸法は桁行が約3.0m(10尺)、梁行が約2.1m(7尺、検出したのは2間分で約4.2m)であり、昭和52年度に調査された西小子房のそれと同一である。

礎石の据付痕跡は、長辺1~1.5m、短辺0.8~1.4mの隅丸方形ないし不整円形で、内部には15~30cm大の川原石を入れこんでいる。残存深さは、確認した部分で8~24cmと極めて浅い(第13図)。SB3120西妻の柱筋は南に並立する東大房の西妻と、北側の柱列は十字廊の東西廊南側柱列と、それ一直線上に並ぶ(第4図)。十字廊SB3100と東小子房SB3120を含めた東僧房が、統一された設計のもとで建設されたことがうかがえる。

なお、東小子房の南側には、2基の柱穴からなるSB3119が検出されている。西僧房の発掘成果を踏まえると、これが大房と小子房の間に位置する付属屋の遺構である可能性もあるが、検出範囲が狭小であるため、詳細は不明である。

南北堀SA3137 東小子房SB3120の西妻の北方で柱筋を備える掘立柱塀。直径1.0~1.3mの四つの柱穴が並ぶ遺構で、柱間寸法は約2.7m(9尺)である。南から3穴目を断ち割ったところ、深さ60cmの抜取穴の中に10cm~30cm大の川原石や軒平瓦が密につまっていた。

前述のように東小子房SB3120の西妻と同一直線状に位置するため、これらと同一の設計下で建てられたものであろう。東小子房北方の空間を東西に隔てる辦と考えられる。

石敷SX3110 十字廊の北方で検出した、南北長さ約6.9m、東西残存幅約0.5mの石敷。西側は近世の溝SD3109で破壊されているが、石の抜取痕跡を残存部分の西側および南側で検出したことから、石敷はさらに西や南に広がるものとみられる。

川原石の東辺は面をそろえており(第15図)、東辺はよく残存して



第14図 東小子房SB3120遺構検出状況(北西から)

いることがわかる。特に東北端では、石の形状がゆるやかなカーブを描いており、それに続く北辺の石も北に面をそろえていることから、北端の位置も確定する。南端は明らかでないが、石の抜取痕跡は、残存している最南端の石よりも1.4m南方まで検出できた。

SX3110と十字廊との間には、後世の溝SD3108が東西を横断するため、両者の直接的な層位のつながりは確認できない。しかし、南北廊東面北側およびその外側と共に通する整地土上にSX3110が据え付けられていることから、十字廊と同時期に存在したものと判断した。十字廊基壇との関係は不明とせざるをえないが、基壇北端にとりついていた可能性は十分に考えられる。

遺構の検出範囲が狭いため性格は明らかでないが、南北を結ぶ石敷通路と考えておく。薬師寺伽藍中心部において発掘された石敷の通路としては、講堂から食堂に向かう3列の石敷があり、「講堂・食堂間参道」と呼称されている(『薬師寺報告』)。なお、残存部分を伽藍中軸線(『薬師寺報告』)で折り返すと、東西幅は約7.2m(24尺)に復元でき、講堂・食堂間参道(3.8m)よりもかなり広い。

礎石建物SB3101 石敷SX3110の北方で南北1間分を検出した礎石建物。柱間寸法は約3.6m(12尺)。礎石の据付痕跡はいずれも隅丸方形で、南北ともに南北1.1m、東西0.8m以上の大きさをもつ。この南北柱筋は、石敷SX3110の東辺と礎石据付痕跡の心をほぼ揃えている。北方の礎石据付痕跡には礎石を残すが、長さ26cm、幅22cmと小ぶりである。これらの礎石据付痕跡には根石とみられる15~35cmの川原石が、それぞれ5~10石埋えられている。また、南方の礎石据付痕跡は、この上から掘りこまれる礎石抜取穴によって一部破壊されているが、この抜取穴にはSB3101の根石として用いられたとみられる20cm大の川原石を含んでいた。

礎石据付痕跡の検出面は石敷SX3110の北端に接する厚さ約10cmの整地土上であることから、厳密にはSB3101はSX3110よりも一段階後行することになるが、両者の配置を考慮に入れるならば、一連の計画下で造られた可能性も十分に考えられる。SB3101の礎石上面の標高は59.48mであり、これは石敷SX3110の上面の標高である59.17~24mよりも30cm前後高い。なお、基壇外装に相当する遺構は検出できなかった。

この2つの礎石据付痕跡の伽藍中軸線(『薬師寺報告』)からの距離は、約3.6m(12尺)である。また、東方の既調査区(昭和50年度)では、これと連続する遺構は検出していない。したがって、中軸線から東西2間ずつ、合計4間程度の建物の可能性が考えられる。一方、南方には石敷SX3110が存在するが、北方へは建物が続く可能性がある。建物の性格は明らかにできないが、十字廊SB3100と石敷SX3110でつながれた、何らかの施設と考えられる。



第15図 石敷SX3110(右)および土坑SK3106(左)(北東から)

掘立柱建物SB3102・SB3103 石敷SX3110の北方で検出した東西棟掘立柱建物。検出したのは2基の柱穴で、北方の柱穴が南北0.8m、東西0.6m、南方の柱穴が南

北0.8m、東西0.9m。今回の調査区の東方でおこなった昭和50年度の発掘調査（第1図）で検出した2棟の奈良時代の掘立柱建物と柱列をそれぞれ揃えることから、これらと同一の建物の柱穴と考えられる（第4図）。北方の建物がSB3102、南方がSB3103で、前述の調査によりSB3102が古いことが判明している（「薬師寺報告」）。

同報告においてSB3102は桁行4間以上、梁行2間、柱間寸法がいずれも8.5尺の建物とされていたが、今回検出した遺構により、桁行6間以上、梁行2間、桁行柱間が約8尺の建物と考えられる。また、SB3103は「薬師寺報告」で桁行4間、梁行2間、柱間寸法はすべて10尺の建物とされていたが、今回の検出により桁行5間以上、梁行2間、桁行柱間が約9.0~9.5尺の建物と考えられる。

SB3103は今回の調査区内で西妻の柱を検出しなかったため、さらに西方へ続く可能性が高く、礎石建物SB3101とは同時併存しないことになる。SB3102・3103はともに奈良時代の建物であるが、礎石建物SB3101を十字廊と同時期と見なすのであれば、これらの掘立柱建物が十字廊の建立された奈良時代後半以前に遡る可能性も考えられる。

掘立柱建物SB3104 石敷SX3110の南部東方において、これと同一面で検出した南北に並ぶ2基の掘立柱穴で、柱間寸法は2.9m（約10尺）である。柱穴の規模は南北0.4m以上、東西0.4m、残存深さ9cm（北）、南北0.7m以上、東西0.8m、残存深さ29cm（南）。北方ではこれらに組み合う柱穴が検出できなかったため、南方にもう1基柱穴が存在した可能性があるが、想定位置は東西溝SD3108が深く掘りこんどおり、遺構が検出できなかった。東方は既往の調査区を含め建物跡が未検出である。規模・性格は不明であるが、ここでは南北の柱筋を揃えるため、同一の掘立柱建物の柱穴としておく。南北の柱穴とともに10世紀後半の土器が出土した土坑SK3107によって破壊されるため、SB3104はそれ以前のものと考えられる。

（4）十字廊建立以後の遺構

土坑SK3132 十字廊の東北入隅部の外側で検出した土坑。入隅の形状に対応して、雨落溝SD3136から40~80cmの距離を置いて掘り込まれている。東西5.3m、南北3.9m以上の隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。鬼瓦・軒平瓦・軒丸瓦など、薬師寺創建瓦を含む多量の瓦が、須恵器円筒瓦や土師器皿など少量の土器とともに極めて高い密度で廃棄されていた（第16図）。

土坑SK3106 北側の拡張区中央部で検出した南北3.8m、東西0.7m以上、検出面からの深さ44cmの土坑。軒平瓦・軒丸瓦など創建瓦を含む多量の瓦が極めて高い密度で廃棄されていた（第15図）。底面近くの最下層では、希炭が集中する厚さ10~18cmの堆積層がある。

土坑SK3107 北側の拡張区で検



第16図 土坑SK3132（南東から、東半は溝構内部を削除済み）



第17図 土坑SK3117土器出土状況（東から）



第18図 土坑SK3118土器出土状況（北東から）

出した、東西0.9m以上、南北3.1m以上の隅丸方形の土坑で、残存深さ44cm。黒色土器椀や土師器羽釜など10世紀後半から末頃の土器が、瓦とともに多量に出土した。

土坑SK3117 十字廊の北東、東小子房の北方に位置する、東西1.2m、南北0.9m、残存深さ36cmのすり鉢状の土坑。土師器皿など10世紀末頃の土器が重ねられた状態で多量に廃棄されていた（第17図）。土器をくくった縁などは確認できなかったが、出土状況から、14の廃棄単位が復元できる。

土坑SK3118 SK3117の西に接する、東西1.2m、南北0.9m、残存深さ22cmのすり鉢状の土坑。土師器皿など10世紀末頃の土器が多量に廃棄されていた。出土状況から11の廃棄単位が復元できるが、特にそのうち1つは、ほぼ同形同大の土師器皿を24枚重ねて廃棄していた（第18図）。やはり、土器をまとめた材料は確認できなかった。

土坑SK3112 十字廊SB3100基壇内の東北入隅部付近で検出した土坑。十字廊の基壇および礎石据付掘方、土坑SK3114を破壊し、土坑SK3113によって埋されている。東西1.1m、南北2.0m以上の楕円形で、残存深さ21cm。土器細片、瓦片および多量の炭が出土した。

土坑SK3113 土坑SK3112および後述するSK3114を掘り込む土坑。東西1.6m、南北1.9m以上の楕円形で、検出面からの深さ36cm。瓦器碗など11世紀の土器が、多量の炭や瓦とともに出土した。

土坑SK3114 前述したSK3112・SK3113の下層にある、東西2.2m、南北1.2m以上、SK3113底面からの深さ35cmの土坑。土坑SK3112およびSK3113に壊されている。螺旋とされる銅製品および土師器碗・杯など10世紀後半の土器が、瓦片や多量の粉炭、微小な炭化材片とともに出土した。

石組溝SD3105 石敷SX3110の北方で検出した東西石組溝。幅は0.6m～1.0m、東西1.8m分を検出した。礎石建物SB3101の礎石抜取穴によって破壊されているが、石敷SX3110を覆う整地上を切り込んで側石の据付溝が掘られる。底面に石を敷かず、人頭大の川原石を南北の側石として並べている。

4 出土遺物

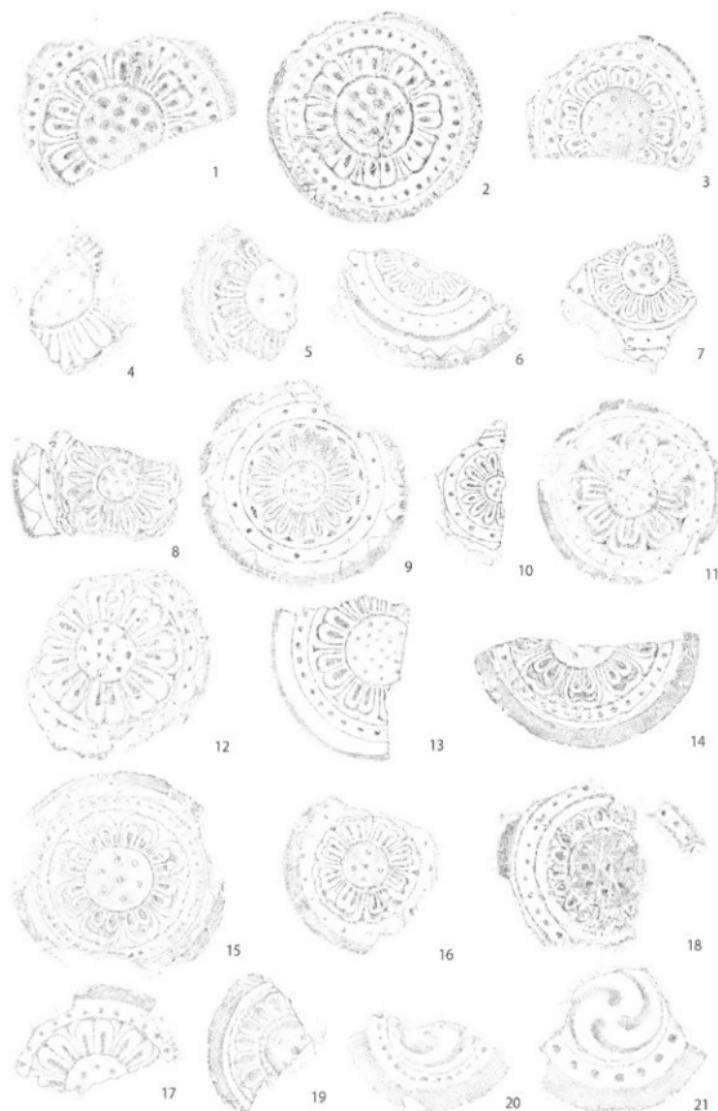
(1) 丸唐類

整理用コンテナ約2100箱もの膨大な量が出土した。これらは現在も整理作業中であり、ここでは主要な軒瓦および鬼瓦、隅木蓋瓦について報告する。軒瓦や鬼瓦は、『薬師寺報告』の型式に準拠したが、奈良時代のものは、『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』(余文研 1996) の型式番号も示した。

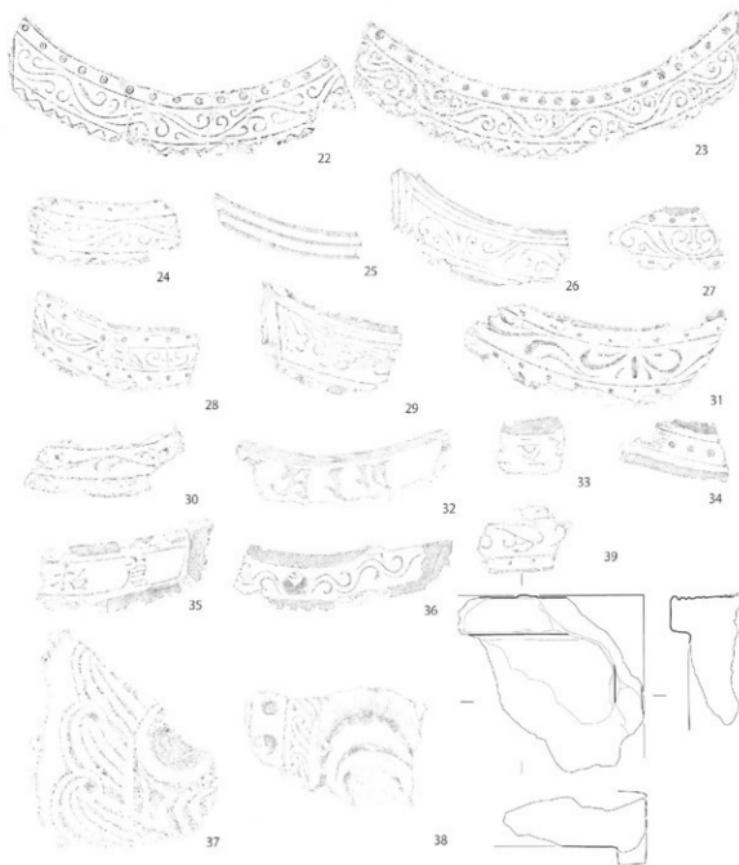
軒丸瓦 1～12は奈良時代の複弁蓮華文軒丸瓦。1～3は本薬師寺および薬師寺の創建瓦。1は薬師寺2a (6276A a) 型式。SK3132出土。2は薬師寺2a 型式の範を彫り直した薬師寺2b (6276A b) 型式。最も多く31点出土した。3は薬師寺3 (6276E) 型式。小型で裳階用の軒丸瓦。SD3111出土。4は外縁が素文になる薬師寺6型式。5は薬師寺9 (6225E) 型式。外縁と外区の境に2重の界線をめぐらす。SK3133出土。6は薬師寺13 (6282H a) 型式。7は6284E b型式。SK3118出土。6284E型式は薬師寺では出土例がなかったが、本調査で3点出土した。8は薬師寺18a (6304E a) 型式。SD3122出土。9は薬師寺18a 型式の範を彫り直した薬師寺18b (6304E b) 型式。本調査では薬師寺2b 型式に次いで26点出土した。10は薬師寺19 (6307C) 型式。小型の軒丸瓦。11は薬師寺33型式。12は薬師寺35型式。13～19は平安時代の蓮華文軒丸瓦。13は薬師寺37型式で中房の選子を不規則に配する。SK3132出土。14は薬師寺38型式。15は薬師寺39型式。SK3107出土。寛弘2年 (1005) に再建された食堂の所用瓦である(『薬師寺概報1』)。本調査では4点出土した。16は薬師寺44型式。17は薬師寺61型式。18は薬師寺68型式。19は食堂の調査(第500次)で初めて出土した新型式(『薬師寺概報1』)。ただし興福寺で同範瓦がある。SD3123出土。20・21は室町時代の巴文軒丸瓦。20は三巴右巻文の薬師寺128型式。中央に珠点が痕跡程度残る。21は三巴左巻文の薬師寺170型式。

軒平瓦 22～29は奈良時代。22～25は本薬師寺および薬師寺創建瓦。22は薬師寺201 (6641G) 型式。22はSK3134出土だが、薬師寺201型式は十字廻の臺地采掘方や羽口石提付溝SX3126からも出土している。また、平瓦部凸面に朱線のあるものがある。本調査の中では最も多く90点出土した。23は薬師寺202 (6641H) 型式。SK3106出土。薬師寺201型式と同様凸面に朱線のあるものがある。薬師寺201型式に次いで数が多く、36点出土した。24は薬師寺203 (6641I) 型式。やや小型で裳階用と考えられる。25は薬師寺209型式。型挽きの三重弧文軒平瓦である。SK3118出土。26は薬師寺214 (6663H) 型式。上下外区脇区と内区の境に二重の界線をもつ。SK3118出土。27は薬師寺218 (6664O) 型式。6点出土。28は薬師寺224 (6685F) 型式。29は6801A型式。修理用製作の瓦であり、薬師寺では初の出土である。ほかにも修理用関連の瓦として、丸瓦に刻印された「理」cが出土した(山崎信二「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」「文化財論叢Ⅲ」余文研 2002)。30・31は平安時代。30は薬師寺252型式。31は薬師寺255型式。SD3122出土。32は平安時代末から鎌倉時代の薬師寺285型式。瓦当面に左から梵字で風・水・地・火・空を意味する「カ・バ・ア・ラ・キヤ」を配する。SK3135出土。33～35は鎌倉時代。33は薬師寺307型式。東院堂の瓦で瓦当面にある「薬師寺東院弘安辛巳」の銘から、弘安4 (1281) 年のものである。34は薬師寺314型式。瓦当面に珠文をもつ。35は瓦当面に「唐招提寺」の銘をもつ軒平瓦。薬師寺に出土例はないが、唐招提寺79型式と同範(奈良県教育委員会・建築研究会「唐招提寺防災工事・発掘調査報告」唐招提寺 1995)。36は室町時代の瓦で薬師寺359型式。中心飾りに宝珠文をもつ。

鬼瓦・隅木蓋瓦 37・38は奈良時代の鬼瓦。37は鬼身文鬼瓦1。体部の巻き毛と右足部分の破片。SD3124出土。ほかにも同一箇所の破片が1点出土した。38は鬼面文鬼瓦A。右頬から口、巻き毛



第19図 出土軒丸瓦（1：4）



第20図 出土軒平瓦・鬼瓦・構木蓋瓦 (1:4)

の頸掻および外縁の珠文が一部残存する。西大寺に同范品があり（奈良県教育委員会・奈文研『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺 1990）、西大寺の創建年代から奈良時代後半のものとわかる。SD3122出土。鬼瓦は他にも中近世の小片が出土している。39は奈良時代前半の構木蓋瓦。前面に花雲文をもつ。側面にも粘土を貼り付け頸部状に作り出す。同范で形状の異なるものが平城宮第一次大極殿西棟の調査で出土している（奈文研『平城宮発掘調査報告書XVII』2011）。

小 結 今回の調査では、奈良時代から近代までの瓦が出土したが、なかでも奈良時代の量の多さが

第2表 出土瓦集計表

軒丸瓦					
型式・種類	点数	型式・種類	点数	種類	点数
秦2 a (6276 A a)	7	秦201(6641 G)	90	近衛丸瓦	1
秦2 b (6276 A b)	31	秦202(6641 H)	36	丸瓦(刻印)	5
秦3 (6276 E)	5	秦203(6641 I)	3	丸瓦(へら笠)	4
秦9 (6225 E)	2	秦214(6641 H)	2	平瓦(刻印)	6
秦13(6282 H a)	1	6663	2	隅切丸瓦	27
6284 E b	3	秦218(6664 O)	6	鬼身文鬼瓦	1
秦18 a (6304 E a)	7	秦224(6685 F)	3	鬼面文鬼瓦 A	1
秦18 b (6304 E b)	26	秦229(6702 G)	1	鬼瓦(中近世)	1
秦18 (6304 E)	4	6801A	1	鬼瓦(近世)	3
秦19 (6307 C)	1	秦209	3	鬼瓦	3
6309	2	秦236?	1	面瓦	3
秦006	1	秦239	1	平御口瓦?	1
秦033	2	秦243	1	製作丸	3
秦034	1	秦245	1	隅本蓋	1
秦035	1	秦252	3		
秦037	1	秦255	3		
秦038	2	秦264	1		
秦039	4	秦285	1		
秦043	1	秦297	2		
秦044	1	秦298	1		
秦052	1	秦307	1		
秦068	1	秦314	1		
秦128	1	秦359	1		
秦149	1	古代	19		
秦167	1	平安	3		
秦170	2	中世	5		
秦192	2	近世	14		
巴(中世)	17	近代	3		
巴(近世)	12	時代不明	1		
巴(古代)	2				
古代	33				
平安	8				
中世	2				
軒丸瓦計	189	軒平瓦計	210		

際立つ。十字廊の壇地業およびSX3126など造営期の遺構からは薬師寺201型式をはじめとする奈良時代の瓦以外出土しておらず、十字廊の造営が奈良時代であることを示している。

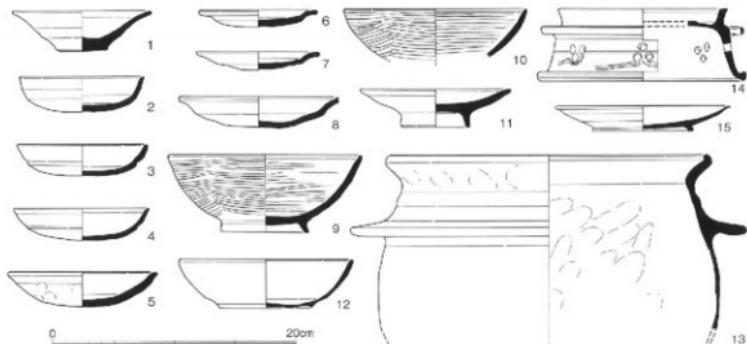
軒瓦に関しては、軒丸瓦は薬師寺2 b・18 b型式、軒半瓦は薬師寺201・202型式が多い。十字廊の所用瓦としてまずこれらが候補になる。しかし、これらの瓦籠の製作年代はいずれも奈良時代前半までであり、奈良時代後半とする十字廊の造営年代とは一見離隔がある。ただし、特に薬師寺2 b・18 b型式は改範されたうえ、全体的に籠の痛みが激しい。こういった状況は長期間に渡る瓦籠の使用を物語る。したがって、薬師寺2 b・18 b型式と薬師寺201・202型式が十字廊造営まで製作された可能性は十分ある。現時点ではこれらの軒瓦の組合せを十字廊所用瓦として想定しておきたい。

(2) 上器・土製品

調査区全域から整埋用コンテナ22箱分の土器・土製品が出土した。奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰陶陶器・黒色土器・中近世の土師器皿・瓦器碗・瓦質土器などがあるが、奈良時代のものは少量であり、SK3117・SK3118をはじめとする10世紀後半から11世紀代の土器が中心である。以下、十字廊の廃絶および周辺の空間利用の実態を考える上で重要な資料を中心に述べる。

SK3118出土土器 SK3118出土土器は土師器杯・皿類を積み重ねて廃棄した状況が復元できる一括資料である。これらは複数の廃棄単位を復元でき、土坑に廃棄する際に、口径の近いもの、同形態の器種ごとに積み重ねて廃棄したとみられる。また、椀・杯・皿の供膳形態に限られる点、灯火器として使用されたものが多い点が特徴である。これらの様相は隣接するSK3117出土土器と同様である。

詳細については現在整理中であるため、SK3118の代表的な土器のみを図示した。**2~4**は杯。口径は10~12cm前後にまとまる。丸底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる**(2)**と、口縁部と底部の境に段を持つもの(**3·4**)がある。**4**は口縁部にススが付着しており、灯火器として使用されたことが分かる。**5~8**は皿。口径9~10cm前後と12~14cm前後の大・小の法量分化が認められる。**8**は口縁端部に強いナデ調整を施し、端部は内側に小さく折り曲げる。これらの杯・皿は全て口縁端部以下をヨコナデで調整するc手法である。**1**は鉢。平底の底部から口縁部が大きく外反



第21図 出土土器実測図 (1:4)

しながら開く。内外面にヨコナデ調整を施す。9は黒色土器B類楕。半球形を呈し、口縁端部に沈線状の段をなす。内外面に横方向の密なヘラミガキを施す。やや外方へ開く高い高台を貼り付ける。

これらの土器は、皿に器壁の厚いものが目立つ点や杯・皿の口径が矮小化し、杯の法量分化が不明瞭になる点から、西僧房床面出土土器群よりもわずかに新しい様相をもち、10世紀後半から末頃に位置づけられる。

SK3113出土土器 土師器杯・皿とともに瓦器碗が出土した。10は瓦器碗で、内外面に横方向の密なヘラミガキを施す。川越編年の第I段階にあたり、11世紀代のものである（川越後一「大和地方の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』泰文研 1983）。11は高台付皿。口縁部が外方に開き、高い高台を貼り付ける。

SK3107出土土器 12は黒色土器A類楕。器壁が薄く、底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。断面三角形のごく小さな高台を貼り付ける。13は土師器羽釜。胴部が張る形態で、口縁部がくの字状に屈曲し、縫部を内に丸く折り返す。幅広の脚を貼り付ける。脚下部および胴部にはスヌが厚く付着し、内面にも突起線とみられる水平方向の変色範囲がある。10世紀後半から末頃に位置づけられる。

SK3132出土土器・土製品 14は圓足円面鏡。底径14.0cm、器高6.0cmである。鏡面が薄く、海部が浅い溝状を呈する。外面に突帯を巡らせ、脚端部は折り返し丸くおさめる。脚部外面に穿孔とヘラ描きを組み合わせて装飾を施す。穿孔は径6~7mmの円孔を穿ち、3点を山形に配して三つ星とする。これを上向きと下向きに交互に配する。また、円孔の下端附近から2条の波状のヘラ描き沈線を施す。これらの装飾は雲文を表現したものであろう。また、突帯には径約1cmの円孔を穿っており、筆立てとしている。外面の降灰状況から正位で焼成したことが分かる。15は灰釉陶器皿。体部が直線的に開き、口縁端部をわずかに外反させる。外面は底部から口縁部下位までロクロ削りを施し、断面が四角でわずかに外に開く高台を貼り付けている。内面全体に灰釉を施釉する。猿投窯編年の黒糸14号窯式に位置づけられる。なおSK3132からは、高台の断面形状が三日月形を呈する黒糸90号窯式に位置づけられる皿も出土しており、複数型式の灰釉陶器が混在して廃棄されていることが分かる。

(3) 金属製品等

瓦壇類や土器・土製品に比べ量は少ないが、銅・鉄・木・石製品、錢貨および植物遺体などが出土した。

銅製品としては、蝶巻と考えられる銅製品1点が土坑SK3114から出土した（第22図）。高さ7.8mm、幅8.6mm、重さ1.2g。表面は部分的に明るい赤銅色の金属光沢を留める。先端部には孔があく。径2mm弱の棒状の銅を巻いて成形している。蛍光X線分析を実施した結果、銅（Cu）が強く検出された一方、錫（Sn）や鉛（Pb）、ヒ素（As）などの成分は検出されなかったことから、材質は不純物の少ない銅製であると判断された。

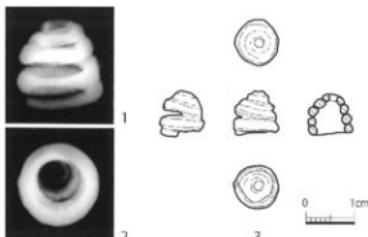
鉄製品としては鉄釘や鉄綫が合計16点出土したが、十字廻と関連するのは土坑SK3132出土の鉄釘1点のみである。

木製品は近世以降の漆器椀や下駄、竹製の導水管や木製綫手が溝SD3122からそれぞれ数点出土したが、十字廻と直接関連するものは出土していない。

石製品には石鏡片、碁石が各1点あるが、いずれも表土なし耕作土からの出土である。

錢貨としては寛永通宝が1点、近世の溝SD3144から出土した。「實」字の貝画末尾が「ス」である（ス貝實）ことから、古寛永（1636-1659年）に分類される。

植物遺体は、自然木のはか樹皮や草茎、種実などが出土した。種実遺体では、土坑SK3114からヤマモモ炭化核とカキ種子が各1点、溝SD3122からモモ核とウメ核、コナラ果実が各1点、遺物包含層からマツ属球果が6点出土した。



第22図 出土銅製品のX線透過写真（1、2）および実測図（3、1：1）



遺物取り上げ作業風景

5 結語

今回の発掘調査では、薬師寺十字廊とその周辺に関するさまざまな知見を得ることができた。中でも十字廊の建物と基壇の規模がほぼ確定したことは、大きな成果である。また、十字廊の周辺の施設、特に北方や東方の空間利用についても、新たな知見を得ることができた。このことは、薬師寺内部の施設配置という面だけでなく、全国的にもほとんど明らかにされていない古代寺院における食堂背後の具体的な様相を明らかにしたという面でも、貴重な成果となった。

調査の主な成果をまとめると、以下の通りである。なお、十字廊の遺構は一時期分しか検出しておらず、これが建立当初のものとみられる。『薬師寺縁起』には、十字廊が天禄4年（973）に火災により焼失した後、寛弘2年（1005）に再建されたとの記述があるが、昭和52年度におこなわれた十字廊西半の発掘調査同様、今回も明確な建て替えの痕跡は確認されなかった。ただし、後述するように、十字廊の基壇を壊す土坑SK3114からは多量の炭とともに10世紀後半の上器が出土しており、天禄4年にあったとされる火災後の片づけとの関連性を検討課題として残す。

（1）薬師寺十字廊の建築

十字廊の規模 今回の発掘調査と過去の成果を合わせて検討した結果、薬師寺十字廊は東西44.4m（150尺）、南北約21m（70尺）の基壇をもつ磚石建物で、建物については、東西廊が桁行11間、梁行1間、南北廊が桁行4間以上、梁行1間であることが判明した。建物規模は、東西41.7m（141尺）、南北14.5m（49尺）以上と推定される。この数値は、東西廊については『薬師寺縁起』に記された規模に一致する。柱間寸法は、東西廊桁行が中央間約5.0m（17尺）、その外側各2間が約3.8m（13尺）、両脇各3間が約3.5m（12尺）、梁行が約5.0m（17尺）と想定された。南に並立する食堂の東西長を41.4m（140尺）ないし40.7m（137.5尺）とする復元案（『薬師寺總報I』）と照らし合わせると、十字廊の建物は食堂のそれよりもわずかに長いことになる。

南北廊については、基壇の南北端位置が遺構で確認できないため、その長さが『薬師寺縁起』の記載通りかは不明である。ただし、十字廊の建物が現状で判明している礎石据付痕跡よりも少なくとも北へは1間のびる可能性が高いことや、周囲の遺構との関係から推測される基壇規模からみて、南北廊についてもやはり『薬師寺縁起』に記された規模と大差ないものと推定される。柱間寸法は、検出された北1間が約3.5m（12尺）、東西廊との接続部が約5.0m（17尺）、南2間が約3.0m（10尺）である。

十字廊の上部構造 『薬師寺縁起』には「高九尺二寸」とされており、柱間寸法からみればやや短いが、廊としては妥当な大きさであろう。柱配置からは切妻造の屋根と考えられ、南北廊と東西廊の梁行規模が同じであることから、両者の棟高や軒高は同じ高さであったとみられる。柱位置と雨落溝の関係から軒の出は1.8～2.5m（6～8.5尺）であり、少なくとも手先の出ない組物を備えた建物と考えられる。なお、前述のように建物南北端の柱位置が不明のため、現状では南北廊基壇の南辺および北辺の柱位置からの出は過大となっている。また、出土瓦の種類と量からみて、本瓦葺であることは疑いない。

基壇築成の工程 検出された基壇は、後世の盃構により平面的に一部が完全に破壊されているだけでなく、全体として上部を大きく削平されているものと考えられた。基壇は、地山上や、地山を掘り込んだ面上に、周辺と一体的な整地を施し、その後版築により積み上げる。基壇外装は、マウンド状に積まれた基壇土の縁辺部を切り込んで基壇外装の据付溝を掘り、地覆石を置かずには羽目石を据え、

その後あるいはそれと同時に素掘り（東西廊より北側）ないし川原石敷の雨落溝（同南側）を掘削する。川原石を用いる部分では、据付溝を掘り川原石を据えた後、周辺の整地を施している。

また、21箇所で検出した礎石据付痕跡は、いずれも上部を大きく削平されているものの、東西廊と南北廊の接続部を中心として、壠地業による強化をはかっている。礎石据付穴は、基壇をある程度積み上げた段階で掘削されている。

（2）十字廊の造営と廃絶の年代

十字廊の造営年代 『薬師寺報告』において、十字廊の造営年代は奈良時代後半頃とされていたが、今回の発掘調査結果もこれと整合する。十字廊SB3100の礎石据付痕跡や、基壇外装SX3126からは、薬師寺201型式（664IG）の軒平瓦など薬師寺創建瓦が出土し、瓦型式の年代のみからは奈良時代前半にも通りうるが、前述の昭和52年度の調査において確認している層位関係から、奈良時代後半にまで下げるのが妥当である。また、十字廊の建立に関わる遺構から平安時代以降の遺物が出土しないため、建立時期の下限は平安時代より古い。さらに、建立当初のものと判断される基壇外装のうち、SX3126に用いられた羽目石が地獄谷産であることは、平城宮内において、奈良時代前半には二上山産を用い、同後半に多く春日山（地獄谷）産を用いるという傾向（『平城宮発掘調査報告XIV』奈文研1993）とも付合する。

十字廊の廃絶年代 十字廊の基壇を壊している土坑群から10世紀や11世紀の土器が粉炭や炭化材とともに出土していることは、十字廊の廃絶や再建年代を考える手がかりとなると考えられる。土坑SK3114は十字廊SB3100基壇内の東北入隅部付近に位置し、10世紀後半の土器器窓・杯が出土している。同遺構は上坑SK3112・SK3113、溝SD3109によって上部を掘りこまれているため、SK3114の掘削後、十字廊SB3100が再建されたかどうかは検証できない。また、十字廊SB3100の外側に分布する廃棄土坑であるSK3107からも、微小な炭化材とともに10世紀後半から末頃に位置づけられる黒色土器碗が出土している。

上坑SK3114の上層に位置し、十字廊基壇を破壊する上坑SK3113からは、SK3114よりやや時代の下る11世紀代の瓦器が出土している。同遺構出土遺物全体についての検討が不可欠ではあるが、十字廊の存続時期の下限を考える上で、一つの参考にはなるであろう。

ただし、出土遺物は膨大な量に上っており、本概報で扱うことができたのはごく一部に過ぎない。出土遺物に対する体系的な整理検討は今後の課題であり、前述の上坑群の性格とともに、その時期的な位置づけについては、遺構・遺物に対する十分な検討をへて、改めておこなわれるべきものである。

（3）十字廊周辺の様相

十字廊の東方 今回の調査により、十字廊SB3100の東方には、想定通りに東小子房SB3120が存在し、この北側柱列が十字廊東西廊の南側柱列の延長線上に位置することが判明した。これは西僧房における様相と酷似しており、一部の範囲に対する発掘にとどまるが、対称性が高いとみてよいだろう。十字廊東西廊東妻と東小子房西妻の間の距離は約6.0m（20尺）で、十字廊の西妻と西小子房の東妻の間の距離とはほぼ等しい。

また、十字廊の北東で、東小子房の西妻から北にのびる南北溝SA3137を検出した。十字廊北方の空間を考えるうえで、重要な成果である。なお、西大寺においては、宝龟11年（780）成立の『西大寺

資料流記帳』にあらわれる「殿」に比定できる礎石建物の東方で、食堂院を南北に仕切る掘立柱殿が検出されているが（『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈文研 2007）、SA3137がこれと類似した機能を持っていた可能性もある。

十字廊の北方 十字廊の北方では参道と推定される石敷SX3110と、さらにその北方に位置する礎石建物SB3101を検出した。また、これらの東方では掘立柱建物SB3102、SB3103、SB3104を合わせて検出した。いずれの遺構も検出範囲が狭小あるため、これらの性格を議論するには十分でない。ただし、規則的な配置関係を示す石敷SX3110と礎石建物SB3101が、十字廊と無関係とは考えがたい。十字廊を含む食堂と関連する建物群が、十字廊よりもさらに北に広がって展開していたと想定できる。

（4）他の寺院との比較

古代寺院において、食堂背後の空間が明らかになっている事例はほとんどない。奈良市の西大寺は、資財帳の内容とあわせて、発掘調査によって食堂を取り廻む「食堂院」の様相が具体的に判明した希少な事例である。これによれば、食堂院においては、南から食堂・殿・大炊殿が中軸を揃えてならび、食堂と殿は3本、殿と大炊殿は1本の軒廊によって結ばれる（前掲『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』）。「食堂院」にはこの他にも東西の椿皮厨や甲双倉などの建物が存在し、食堂での活動と関連した諸施設が多数必要だったことがわかる。

資財帳から食堂背後の様相を知ることができる事例としては、前述の西大寺のほかに同じく奈良市に所在する興福寺・元興寺・大安寺・東大寺などがあり、なかでも東大寺については、正倉院中倉所蔵の『殿堂平面図』に、食堂の背後に付属するT字形平面の建物が描かれている。この形態は、興福寺でも同様に復元されている。また、元興寺については明確な位置を知り得ないものの、食堂と食殿が南北に配され、両者が軒廊でつながっていたものと想定されている。大安寺についてはさらに資料が少ないが、食堂に付属する建物として「廊」があるとされる（以上はいずれも『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研 1959）。

以上から、古代寺院においては、食堂がその機能を果たすためのさまざまな施設が群をなして食堂背後に存在し、中でも「殿」や「食殿」、「廊」といった建物が食堂に付属していたことがわかる。「食殿」とも呼ばれた薬師寺十字廊もこうした建物の一つと考えられるが、これが梁行の大きな東西棟建物ではなく、東西方向の建物と同規模の南北廊が接続して十字形を呈している点が、特徴といえるであろう。



調査風景

報告書抄録

ふりがな	やくし きゅうけいだいほぞんせいびけいかくにともなうはくつちょうさいはう に							
書名	薬師寺							
副書名	旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報							
巻次	II							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	庄田慎矢・小田裕樹・石田由紀子・箱崎和久・馬場 基							
編集機関	独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町2丁目9-1 Tel 0742-30-6733							
発行者	法相宗大本山 薬師寺							
所在地	〒630-8563 奈良県奈良市西ノ京町457 Tel 0742-33-6001							
発行年月日	西暦 2014年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
やくし 薬師寺	奈良けん奈良市 にのやまとやまと 西ノ京町	29201	05C-0031 -A	34度 9分 4秒	135度 47分 3秒	2013.9.17 ? 2014.2.28	872	境内整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項		
薬師寺	寺院	奈良時代 江戸時代	十字廊 基壇 雨落溝 石敷 柱穴列 廐棄土坑	瓦 土師器 瓦 器 灰釉陶器 金属製品	瓦 土師器 瓦 器 灰釉陶器 金属製品	十字廊基壇・礎石据付掘方を検出し、基壇および建物規模を明らかにしたほか、十字廊の造営・廐棄に関する年代的手がかりを得た。また、東小子房の礎石据付掘方や十字廊の北に位置する石敷通路、礎石建物の礎石据付掘方も検出した。		



2014年3月24日 印刷

2014年3月26日 発行

薬師寺

旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報II

編集 独立行政法人 国立文化遺産機構
奈良文化財研究所

発行 法相宗大本山 薬師寺
〒630-8563 奈良市西ノ京町457
印刷 能登印刷株式会社